

令和 5 年 6 月 7 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K01294

研究課題名（和文）面倒感がリスクになる？ - コスト評価に着目した安全教育プログラムの有効性評価 -

研究課題名（英文）Evaluating the effectiveness of safety education programs with a focus on cost evaluation

研究代表者

臼井 伸之介 (usui, shinnosuke)

大阪大学・大学院人間科学研究科・教授

研究者番号：00193871

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）： ヒューマンエラーや規則違反などの発生メカニズム解明を目指した研究は多いが、そのような不安全行動の抑制に焦点を当てた安全教育の実証的研究は少ない。森泉ら（2014）は臼井（2008）が開発したエラー体験プログラムを用いて、安全教育の効果を検討したところ、時間コストの過大評価に起因する規則違反の抑止に、安全教育の効果があることを見出した。そこで本研究は、教育を課さない統制群を新たに設定し、教育の効果を検討したところ、教育直後には、安全教育の効果は見られず、教育効果の測定のタイミングや測定指標に、さらなる検討の余地が残された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

労働災害や交通事故などの発生にはヒューマンエラーや規則違反など人間の不安全行動が関与するケースが多い。特に規則違反のような人間の敢行意図が介在する不安全行動には、教育的な介入により、その抑止が期待できる。本研究では、筆者が開発したエラー体験プログラムを用いて、確認など安全作業実施に必要な時間や労力のコストの過大評価が、規則違反に繋がることを実証的に検証しており、その教育プログラムの適切な展開は、不安全行動による事故防止など、社会の安全性向上に多大に寄与するものとなる。

研究成果の概要（英文）： Although there are many studies aimed at elucidating the mechanisms of human error and rule violations, there are few empirical studies on safety education aimed at curbing such unsafe behavior. Moriizumi et al. (2014) examined the effects of safety education using the error experience program developed by Usui (2008) and found that safety education was effective in deterring rule violations caused by overestimation of time costs. Therefore, this study examined the effect of education by setting up a control group in which no education was imposed. As a result, it was found that the effect of safety education was not observed immediately after the education, indicating that further study is needed on the timing and measurement indexes for measuring the effect of education.

研究分野：社会システム工学

キーワード：労働安全 ヒューマンエラー 規則違反 安全教育

1. 研究開始当初の背景

わが国において 2016 年に発生した労働災害による死傷者数(死亡・休業 4 日以上)は 117,910 人であり、うち死亡者数は 928 人であった。労働災害に関わる要因は様々であるが、労働者の不安全な行動の防止が重要となることは言うまでもない。作業者が起こしうる不安全行動には、非意図的な行動としてのヒューマンエラー、意図的な行動としての規則違反やリスクテイキング行動(危険を意図的に受容する行為)が挙げられる。ヒューマンエラーや規則違反などの発生メカニズム解明を目指した研究は多いが、そのような不安全行動の抑制に焦点を当てた安全教育の実証的研究は少ない。

2. 研究の目的

臼井ら¹⁾は、平成 25-28 年度科学研究費(基盤 B)「エラー体験プログラムを用いたリスクマネジメント教育の介入効果」において、ヒューマンエラーや違反を誘発する事態をパーソナルコンピュータ上の認知的課題で擬似的に体験可能にする「エラー体験プログラム」を開発した。エラー体験プログラムは、人間の情報処理能力の限界や不安全行動の生起メカニズムについて経験として学習可能な教育プログラムであり、「中断体験」「注意の偏り体験」「違反体験」、および「注意・失敗傾向」の計 4 種のメニューで構成される。図 1 は、エラー体験プログラムのメニュー画面である。そしてその教育効果を検証するため、森泉ら²⁾は、消防士 87 名を対象に、エラー体験プログラムのうち「注意の偏り体験」と「違反体験」を安全研修の一環として実施した。その結果、非意図的な「注意の偏り」に関する不安全行動については教育による変化は見られなかった一方で、意図的な不安全行動である「規則違反」については、教育から 6 か月後に教育前よりも取行頻度が減少したことが報告され、エラー体験プログラムの有効性が示された。

ただし、その有効性の評価は教育前後の(自己報告された)行動の変化のみによって示され、

教育によってどのような心理的变化が生じ、行動の変化に繋がったのかといったメカニズムの検証は不十分であった。そこで本研究では、「エラー体験プログラム」実施後に、プログラムにて教育のねらいとした点について参加者自身が抱いた印象の評価を直接求め、また教育直後の態度変化について、教育を課さない統制群との比較から検証することを研究目的とした。



図 1 エラー体験プログラムのメニュー画面

3. 研究の方法

(1) 参加者

教育群の参加者は、A 市の消防署に勤務する消防士 17 名(全て男性)であった。平均年齢は 37.35 歳、職務経験年数は平均 15.35 年であった。統制群について、実際の安全教育の場では「教育を実施しない群」を実験的に設定するのは容易でない。そこで統制群の参加者は、実験群と年齢と人数の点で概ね一致させるように人材派遣会社を通じて募集された一般成人 21 名(男性 10 名、女性 11 名)とした。平均年齢は 43.76 歳($SD = 2.81$)であった。

(2) 実施した安全教育

エラー体験プログラム

教育群に対して、「エラー体験プログラム」のうち、教育実施時間の都合上、「注意の偏り体験」または「違反体験」のいずれか1つを実施した。統制群においては、安全教育と関係しない知覚判断課題を約40分間実施した。

a. 注意の偏り体験

PC画面中央に提示した写真とその周辺に4か所配置されたメーターの両方に生じる変化の検出を同時に求める体験であった。練習試行として、写真のみ、またメーターのみの変化を検出する課題を各1回行った後、本試行にて両方の検出を計10回行った。終了後、本メニューの趣旨および、関連する実際の事故事例2件(例・トラックの上で積荷を固定するシートを後ろ向きに移動しながら広げていると、その作業に気をとられて積荷の後端まで移動したことに気付かず、足を踏み外し地面に落下した)とその対策等についてイラスト付きで解説した。本メニューの所要時間は30分程度であった。

b. 違反体験

ダミー課題としての知覚判断課題および本課題である試行数確認課題を実施した。知覚判断課題では、画面上に提示された判断基準(例・偶数)が、その後に提示される課題刺激(例・4)と適合しているかの判断を求めた。試行数確認課題は、知覚判断課題の直後に付随的に実施された。本体験では、教示にて実施を義務化した試行数確認課題を省略した場合を「違反」と定義した。規則遵守に伴うコスト(本プログラムでは待機時間)を操作することで、特にコストが高い場合に違反がより取行されやすいことを体験させた。知覚判断課題開始から試行数確認課題終了までを1試行とし、練習では5試行、本番では48試行実施した。本試行後、本体験の趣旨についての説明を行い、本体験メニューと関連する実際の事故事例2件(例・高所作業車の過積載規制装置が作動したが、「あと少しだから」と資材の積み込みを続けた結果、資材の重さに支柱が耐え切れず折れ曲がり、斜めになった作業床から作業者が床面に転落した。)とその対策等に関する解説を行った。本メニューの所要時間は30分程度であった。

グループディスカッション

エラー体験プログラム終了後、プログラムのさらなる理解を目的として、関連するヒヤリハットや事故に関するディスカッションを行った。具体的には、自身が体験したメニューごとに3人から4人1組のグループに分かれ、日常場面・労働場面問わず、体験メニューで扱った不安全行動・ヒューマンエラーにより発生しうる事故やヒヤリハットについて、まず各グループで出来る限り多くの事例を挙げた。それらは発生可能性や被害の大きさの観点で重みづけを行った後、最も重要度の高い事例の発生原因について、ヒューマンファクターに着目して背景要因の探索を行った。その後、探索した要因からヒヤリハットや事故の防止策を討論するように求めた。討論結果は、グループごとに代表者によって発表され、研究代表者から講評を行った。

(3) 教育効果の測定

教育内容に関する評価

実施した教育内容に関する評価として、教育群のみに対して、a.「エラーや違反を自分も起こしうることが理解できたかどうか」、b.「エラーや違反が発生する理由を理解できたかどうか」、c.「研修内容と類似の要因から生じる事故等が、日常業務でも起こりうると思ったかどうか」、d.「今後安全に業務を行う上で役立つと思ったかどうか」を質問した。7件法(1.まったくそ

う思わない～7. まったくそう思う)にて評価された。

教育に関連する不安全行動の経時変化

「注意の偏り体験」に関連する質問項目として3項目(例. あることに集中すると、それに気を取られて回りに気付くのが遅れてしまう)、「違反体験」に関する質問項目として3項目(例. 確認を何度も繰り返していきうちに、つい面倒になって確認を省略してしまう)に5件法で評価を求めた。

(4) デザイン

群(教育群/統制群)×評価時期(教育前/教育直後)の2要因混合計画であった。

4. 研究成果

(1) 教育内容に対する評価

教育群の参加者に対して、教育終了後に評価を求めた質問項目について評定値の平均を算出した。a. 「エラーや違反を自分も起こしうることが理解できたかどうか」については、 $M = 6.29$ ($SD = 0.85$) b. 「エラーや違反が発生する理由を理解できたかどうか」については、 $M = 5.88$ ($SD = 0.86$) c. 「研修内容と類似の要因から生じる事故等が、日常業務でも起こりうると思ったかどうか」については、 $M = 6.35$ ($SD = 0.79$) d. 「今後安全に業務を行う上で役立つと思ったかどうか」については、 $M = 6.41$ ($SD = 0.71$)となった。いずれの項目も、最小値は「5」、最大値は「7」であった。いずれの項目においても、評価点「4」(どちらでもない)よりも有意に高かった(順に、 $t(16) = 11.14$ 、 $t(16) = 9.05$ 、 $t(16) = 12.34$ 、 $t(16) = 13.96$ 、 $ps < .001$)。以上の点より、エラー体験プログラムの教育のねらいを体験者が適切に理解できていたことが示唆された。

(2) 教育に関連する不安全行動の経時変化

教育に関連する不安全行動の質問項目について、「注意の偏り体験」に関する3項目の平均および「違反体験」に関する3項目の平均を参加者ごとに算出した。いずれの指標も、得点が高いほど不安全な傾向であることを表す。表1に、評価時期ごとの不安全行動に関する質問項目の要約統計量を示す。表1の通り、係数が.50程度である指標も見られるが、各指標を構成する項目は3種類しかないことから、本研究ではこのまま分析に用いた。

以上のデータに関して、群(体験群/統制群)と評価時期(教育前/教育直後)を独立変数とする2要因分散分析を実施した。その結果、「注意の偏り体験」の指標について、群、評価時期の主効果およびそれらの交互作用はいずれも非有意であった(順に、 $F(1, 56) = .34$ 、 $p = .57$ 、 $\rho^2 = .01$ 、 $F(1, 56) = .30$ 、 $p = .59$ 、 $\rho^2 = .01$ 、 $F(1, 56) = 1.63$ 、 $p = .21$ 、 $\rho^2 = .03$)。

表1 関連する不安全行動の経時変化

不安全行動の種類		教育群	統制群
注意の偏り	教育前 ($\alpha = .52$)	2.63 (0.55)	2.85 (0.87)
	教育直後 ($\alpha = .60$)	2.69 (0.49)	2.71 (0.88)
違反	教育前 ($\alpha = .55$)	2.92 (0.67)	2.72 (0.82)
	教育直後 ($\alpha = .68$)	2.90 (0.81)	2.63 (0.95)

「違反体験」の指標においても同様に、群、評価時期の主効果およびそれらの交互作用は全て非有意であった(順に、 $F(1, 56) = 1.00$ 、 $p = .32$ 、 $\rho^2 = .02$ 、 $F(1, 56) = .63$ 、 $p = .42$ 、 $\rho^2 = .01$ 、 $F(1, 56) = .23$ 、 $p = .63$ 、 $\rho^2 = .004$)。

注) 括弧内はSD

(3) 体験型安全教育の効果

教育前後における体験メニューと関連した不安全行動の頻度の変化について、教育を実施しない統制群を比較対象とした検討を行ったところ、教育実施による変化は見られなかった。森泉ら²⁾では、非意図的な「注意の偏り」に関する不安全行動については教育による変化は見られなかった一方で、意図的な不安全行動である「規則違反」については、教育から6か月後に教育前よりも取行頻度が減少したことが報告され、エラー体験プログラムの有効性が示されたが、本研究では、教育直後では、「注意の偏り」「規則違反」ともに教育による変化は見られなかった。森泉らは、エラー体験プログラム「注意の偏り体験」「違反体験」の実施によって、注意の偏りの防止が容易でない点や、誰にでも違反が生じうる点を学習することから、体験が自身の日常行動を顧みる契機となり、教育直後には報告される不安全行動が増加する可能性を指摘していたが、今回の測定方法の限りではそのような現象は確認されなかった。従って、(報告される)行動の変化においては、教育から一定期間を空けた後に評価するべきであり、同一パラダイム内での態度変化においては別の指標を用いるべきであるといえる。

参考文献

- 1) 臼井伸之介：リスクマネジメント教育の有効性評価に関する総合的研究 2008 厚生労働科学研究費補助金労働安全衛生総合研究事業 平成19年度総括・分担報告書，1-147.
- 2) 森泉慎吾，臼井伸之介，和田一成：エラー体験型教育の効果 2014 労働科学，90(5)，171-182.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 森泉 慎吾・白井 伸之介	4. 巻 5
2. 論文標題 リスクテイキングにおける行動経験とベネフィット認知の関係	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 帝塚山大学心理科学論集	6. 最初と最後の頁 13-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 白井伸之介	4. 巻 73
2. 論文標題 人間は変わる、人間は変わらない	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 生産と技術	6. 最初と最後の頁 1-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Moriizumi, S. & Usui, S.	4. 巻 46
2. 論文標題 Preliminary study on the component of perceived benefit in ris-taking	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 応用心理学研究（英文特集号）	6. 最初と最後の頁 38-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森泉慎吾・白井伸之介	4. 巻 45
2. 論文標題 時間節約バイアスの抑制に関する実験的検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 IATSS Review	6. 最初と最後の頁 198-205
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 臼井伸之介	4. 巻 62
2. 論文標題 「不安全行動はなぜ起きる？ -ヒューマンエラー・規則違反の心理的発生メカニズム-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 プレストレスコンクリート	6. 最初と最後の頁 22-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Moriizumi Shingo, Usui Shinnosuke	4. 巻 62
2. 論文標題 Risk Taking by Young People in Late Adolescence Increases When They Perceive the Possibility of Their Peer "Observing Someday"	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Japanese Psychological Research	6. 最初と最後の頁 131 ~ 137
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/jpr.12274	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森泉慎吾・臼井伸之介・和田一成・上田真由子	4. 巻 94
2. 論文標題 急ぎ・焦りエラーに関する体験型教育の効果	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 労働科学	6. 最初と最後の頁 99-107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中井 宏・岡真裕美・臼井伸之介・森泉慎吾	4. 巻 17
2. 論文標題 小学生に対する安全教育プログラム「ひなどり」の開発と実践 学校内での負傷予防を目指して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 安全教育学研究	6. 最初と最後の頁 33-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安達悠子・松本友一郎・臼井伸之介	4. 巻 94
2. 論文標題 医療に係る安全管理のための職員研修に関する事例報告：研修義務化直後の6病院での取り組みを通して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 労働科学	6. 最初と最後の頁 132-141
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 太子のぞみ・臼井伸之介	4. 巻 10
2. 論文標題 高齢運転者の運転が困難な状況での運転頻度及び運転回避頻度における性差	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 労働安全衛生研究	6. 最初と最後の頁 75-83
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森泉慎吾・臼井伸之介・和田一成	4. 巻 39
2. 論文標題 体験型安全教育の実施と展望	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本信頼性学会誌	6. 最初と最後の頁 334-341
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計23件（うち招待講演 0件／うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Moriizumi, S. & Usui, S.
2. 発表標題 Effects of impression and social distance: A study in risky decision-making for others,
3. 学会等名 32nd International Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Nakai, H., Oka, M., Usui, S. and Moriizumi, S.
2. 発表標題 Implementing a safety education programme for Elementary School Students
3. 学会等名 32nd International Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森泉慎吾・臼井伸之介
2. 発表標題 ドライバーへの感謝が無信号横断歩道での一時停止に及ぼす影響 - 質問紙調査による検討 -
3. 学会等名 日本応用心理学会大会第87回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 上田 真由子・中井 宏・臼井 伸之介
2. 発表標題 簡易版認知再構成法はプレッシャー下のパフォーマンス低下を軽減する n-back課題を用いた実験的検討
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森泉慎吾・臼井伸之介
2. 発表標題 「他人のため」のリスク下の意思決定における人数の影響
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 菊池勇哉・森泉慎吾・中井宏・白井伸之介
2. 発表標題 鍼灸施術時の不安全行動に伴うベネフィット認知 鍼灸師、学生、教員間での比較
3. 学会等名 第69回（公社）全日本鍼灸学会学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 橋本采栄・森泉慎吾・中井宏・白井伸之介
2. 発表標題 作為と不作為のリスクに対する認知の違い
3. 学会等名 日本応用心理学会大会発表代替論文集
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 菊池勇哉・森泉慎吾・中井宏・白井伸之介
2. 発表標題 鍼灸臨床における不安全行動に対するリスク認知 鍼灸師、学生、教員間での比較
3. 学会等名 第68回（公社）全日本鍼灸学会学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 上田真由子・和田一成・白井伸之介
2. 発表標題 焦り慌てエラーに対する事前の対処法メカニズムーなぜエラーが改善するのかー
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 橋本采栄・森泉慎吾・中井宏・臼井伸之介
2. 発表標題 「異質のリスク-ベネフィット状況におけるリスクテイキング
3. 学会等名 日本応用心理学会大86回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 太子のぞみ・浅田克子・臼井伸之介
2. 発表標題 高齢ドライバーの減速行動と身体機能についての実験的検討
3. 学会等名 第9回日本認知症予防学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Moriizumi, S. & USUI, S.
2. 発表標題 Preliminary study on the component of perceived benefit in risk-taking
3. 学会等名 28th International Congress of Applied Psychology, Montreal, Canada (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤本吟藏・森泉慎吾・臼井伸之介
2. 発表標題 建設技術者がリスクテイキングへ至る背景要因に関する研究
3. 学会等名 日本応用心理学会第85回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 上田真由子・和田一成・臼井伸之介
2. 発表標題 踏切標識のデザインが自動車ドライバーの行動を変容させる
3. 学会等名 日本応用心理学会第85回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森泉慎吾・臼井伸之介・和田一成・上田真由子
2. 発表標題 急ぎ・焦りエラーに関する体験型教育の効果
3. 学会等名 日本人間工学会第58回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 菊池勇哉・中條洋・森泉慎吾・臼井伸之介
2. 発表標題 鍼灸実習における学生の不安全行動の実態把握 - 観察による実態把握 -
3. 学会等名 第66回（公社）全日本鍼灸学会学術大会東京大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 菊池勇哉・森泉慎吾・臼井伸之介
2. 発表標題 鍼灸実習時に敢行される不安全行動の背景因子の検討
3. 学会等名 日本応用心理学会第84回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 森泉慎吾・臼井伸之介
2. 発表標題 時間的コスト認知とリスク受容に関連する心理的要因の関係
3. 学会等名 産業・組織心理学会第33回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 森泉慎吾・臼井伸之介
2. 発表標題 安全教育の効果を阻害する要因に関する実験的検討
3. 学会等名 日本心理学会第81回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 岡真裕美・森泉慎吾・太子のぞみ・中井宏・臼井伸之介
2. 発表標題 児童の自主性を生かした安全教育の効果(2)ハザードへの気づきに与える影響
3. 学会等名 日本教育心理学会第59回総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 菊池勇哉・森泉慎吾・臼井伸之介
2. 発表標題 鍼灸実習時の不安全行動に対するリスク認知-学年間の比較-
3. 学会等名 成29年度(公社)全日本鍼灸学会 第37回近畿支部学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 菊池勇哉・森泉慎吾・臼井伸之介
2. 発表標題 鍼灸実習時の不安全行動に対するリスク認知 - 学生と教員との比較 -
3. 学会等名 医療の質・安全学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 片山裕貴・淵真輝・藤本昌志・廣野康平・臼井伸之介・小西宗
2. 発表標題 操船シミュレータを用いた教育効果の検討について
3. 学会等名 平成29年度日本人間工学会関西支部大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 産業・組織心理学会、芳賀 繁	4. 発行年 2019年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 276
3. 書名 よりよい仕事のための心理学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	森泉 慎吾 (moriizumi shingo) (50735066)	大阪大学・人間科学研究科・助教 (14401)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	太子 のぞみ (taishi nozomi) (70632462)	同志社大学・心理学部・研究員 (34310)	
研究分担者	上田 真由子 (ueda mayuko) (70823764)	大阪大学・人間科学研究科・助教 (14401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関